

ダンスする



たとえば俺は今、夜明けの重力を感じている。

先ほどまで深く沈みこんでいたはずの夜の色は、俺の頭上で鮮やかに上昇しようとしている。その空に見える夜と朝の境目は、一本の筋になって晴れた空を分けている。俺がつま先をアスファルトに摺りつける音が、まだ目覚める前の空間に響いているのが見える。

眠れないのは一緒に住んでいた兄が死んでしまったせいなのだ、と言えればよかったが、しかし、違った。兄が活着ている時分から、俺は上手く眠ることが出来なかった。兄が死ぬずっと前から、眠れない夜の長さは俺の背中にしつこくしつこく張りついていた。それがセミの抜け殻のように、というのは些かアホくさい比喩であろうか。

眠れないのなら散歩でもしてみたらどうか、と言ったのは兄だった。夜中にうろうろと狭い部屋の中を徘徊する俺がうるさかったのだ。人間は活着ているだけで時分が思っている以上の音を立てるのだ、とそれとは全く別のタイミングで兄が言ったのを覚えている。

「生きてるだけで騒音」と、ひっひっひっ笑っていた。

俺の、クソみたいな兄。

わけのわからん病気でおっ死んだ兄。

死んだ後にはやたら散らかったままの部屋が残った。それは、俺と兄と一緒に住んでいた部屋だ。マンションの一室で、キッチンとリビングがあって、俺と兄の部屋が一つずつある。基本にお互いの部屋には殆ど出入りしなかったもので、俺は兄の死後、初めてその部屋に入る。兄がおっ死んでから一週間ほど経ったその日は雲一つない晴れ空が曇りガラスの外からリビングを青白く照らしていた。

ドアの取手はじんじんと震えながら、その冷たさを手のひらに残した。俺はそのまま取手を下げてドアを引き開けた。中から一筋、風が吹き込んできた気がした。虫のような匂いのした、ぬるくさい風だった。風、というよりは、息、といったほうが上手く伝わるかもしれない。兄の部屋が吐いた息は、俺の頬を柔らかく撫でた。

ドアを開けると、リビングの照明が兄の部屋に届く。

現れた兄の部屋は、それがまともな人間の部屋であるとは到底思えぬほど散らかっていた。本や衣服やCD、そして飲みかけのペットボトルなどが部屋の中央に敷かれたままの布団の周囲に積み重なっている。俺は足の踏み入れ場を探しながら右足を持ち上げ、しかし見つからないので表紙の剥がれた文庫本の上に踏み下ろす。表紙の剥がれた文庫本の下には三冊ほどの本が積み重なっているのが見える。俺が足を踏み下ろすと、その積み重なりが崩れる。崩れた重なりはその隣の重なりにぶつかって、崩す。それが、広がる。俺の踏み下ろした右足を起点にして、部屋中のものが崩れてゆく。それは水面に広がる波紋のようである、とも思うし、絶えず崩れ続ける砂浜のようである、とも思う。本やCDが崩れてゆく音が、薄暗いままの部屋をかさ、かさ、と動き回る。

俺はそれでも恐る恐る、これ以上ものを崩さないように、兄の部屋に足を踏み入れてゆく。左手に兄の残したメモを持って。割りとき死に際に書かれたものなので、その文字はひどく振れている。振れすぎていて何が書いてあるのか誰も、判らない、と言う。しかし、俺には判る。何故なら俺と兄はたった二人の兄弟であるからだし、俺と兄はたった二人の兄弟であるからだ。理解している、というのがたとえ勘違いであっても。俺は兄を理解しているし、兄も俺を理解している。

だから俺は誰も理解できないそのメモを持って、布団の傍らに設置されている兄のPCの前に座る。布団はごわごわして未だに湿っている。不意に、誰かの舌の上に座っている気分になる。それが兄のものでないことを俺は願う。兄の舌の上に座る、というのは素直に気持ちが悪いから。

PCの起動音が部屋の空気をぶつぶつと震わせた。

眠り続けていた部屋が、それでようやく目覚めたのだ、と俺は思った。

パスワードは特に設定されていない。数十秒の後に、そのままデスクトップが表示される。壁紙には女性のヌード写真が設定されていた。日本女性の、それも恐らく職業的な理由で裸になるような女性ではない女性の写真だった。つまり、素人女性のヌード写真だ。照明の当たり方で判る。兄はその女性の裸体の上に重なるように、乳房やへそや脇に重なるように、アイコンを設置していた。メモに指示されていたフォルダはちょうどその股間の部分にあった。白い色をした、傘の絵のアイコンだった。俺はその股間のフォルダを展開する。

入っているのは、文書ファイルが一つ。メモには消去するように指示されているが、俺はその文書ファイルを開いた。ファイル名は『自殺しない』文書の内容は日記だった。

わけのわからん病気でおっ死んだ、俺のクソみたいな兄の日記だ。

俺は今、その時読み耽ったその日記を頭でなぞっている。プリントアウトしたその文書をポケットに突っ込みながら、夜が明ける寸前の街路を歩きながら。耳の穴に突っ込んだイヤホンからは兄の部屋から拝借してきたCDが流れていて、俺の足音は浮かぶ風のように、やがて耳の中のロックンロールに掻き消されている。

兄の日記は普通の日記だった。何の変哲もない日記。その日あったことが記されていて、兄の考えたことや思ったことも記されている。調べたが、時にウェブにアップされている様子もなかった。誰に見られることもなかった日記だ。その日何を思ったのかなど何故一々記す必要があるのか俺には理解できないが、兄はそれをしていて、そしてそれは容態を崩して入院させられるまで毎日欠かさず続けられていた。

その日、俺は日記を端から端まで読み終えて、非常に気分が悪くなった。眼球を通過して脳髄で読み取った兄の言葉が思考が感情が俺の裏側に張り付いて張り付いて、記された日数分積み重なって、こびりついて。俺は目を瞑りながら、死んでしまった兄の思考が今なお生きて自分の頭の中でのた打ち回っているのだ、と思った。

ああ、と思った。

喉を震わせた。

これは呪いのよう、なのだ。俺は兄を飲み込んでしまって、兄が俺にこびりついてしまったのだ。脳髄で理解した言葉はいつの間にか俺のか細い血管を通り、隅々に行き渡ってしまったのだ。俺は俺の血管の中で兄の言葉が禍々しく脈打っているのを感じているし、それは夜明けを歩き続けるこの今も変わらない。

変わっていない。

耳の中のロックンロールはただ生きてるだけののように、けたたましく、鳴り響いている。俺の喉と太ももの筋肉は夜明けの中で、その騒がしい音楽を静かになぞっている。その音楽と一緒にあって、兄の言葉の蠢きが踊り狂っているのが判る。

歩いている。

夜を歩いているのは、兄が死んでしまったからだ。

違う。

夜を歩いているのは、眠れないからだ。俺は仕事を辞めるずっと前から、上手く眠ることが出来ない。横たわる夜は時折、覚めることを忘れた夢のように思える。眠れないのは兄が死んでしまったせいではない。兄がおっ死んだのはわけのわからん病気にかかってしまったからだ。痩せこけて、死んでしまった。鉄のような色になりながら。泡みたいに震えながら。薄笑いを浮かべながら。

それでも兄の言葉は今、俺の中で生きて蠢いている。俺の中で踊り狂っている。主語と接続詞が手をとって旋回し、福祉と形容動詞はどしゃ降りの雨のように跳ね回っている。動詞は俺の頭の中でかい声を張り上げながら重苦しいステップを踏んでいる。

だから、俺も、踊る。

朝焼けの中、筋肉を収縮させて。足の底でアスファルトを打って。まだ誰もいない街の中で旋回する。頭上では青よりも緑に近い青空が太陽のほうからじんわり広がって、俺はいつのまにかでかい声を張り上げている。

「生きてるだけで騒音」と、兄は笑う。

日記を書く。

急な運動で息を切らせながら、声を張り上げながら、俺は足をもつれさせて倒れる。その時、手のひらに感じたアスファルトの冷たさが泡のように震える兄の頬の冷たさに似ていた、と言ったら兄は怒るだろうか。俺はそのことが無性におかしくて、誰にも見えないように薄笑いを浮かべたのだ。